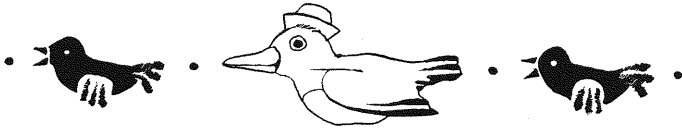


私が幼児教育を志した頃(6)

津守 真

科学としての心理学との出会い

戦後直後の昭和二十一年、二十二年、破れたガラス窓の教室で、外套の襟を立てて吸い付けられるように私共が聴いた講義は、哲学から独立して歩み始めた科学としての心理学であった。戦争による破壊の後、何事も新しく第一歩から始めようという気概の溢れていたこの時期、それまでに染み付いた価値から解放されて、個としての人間を研究しようとする科学的心理学は時代の要求にも適していたのであろう。その頃の研究態度には批判する点もあるけれども、いまなお自分の中に生きている真実を含



んでいる。

事実と理論の透明性

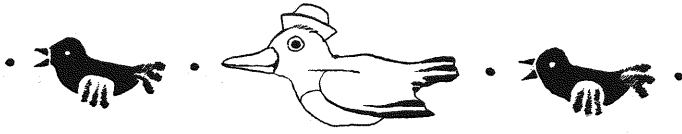
当時、東大文学部心理学科教授の高木貞二先生は、とくにティチエナー (E. B. Titchener) の実験心理学の考えを好んでおられた。『実験心理学』『初心者のための心理学』などの著者であるティチエナーがモットーとしていたのは「透明さ (トランスペアランシー)」であった。色眼鏡なしに透明な眼で事実を見ること。そのような事実を積み重ねて理論を作ること。理論もまた単純で透明でなければならぬ。

「人がある事柄について、明晰で偏見のない意見を求めるならば、多くのことを忘れて、恰も以前には何も知らなかったようにそれを見ることを始めなければならない。

— E. B. ティチエナー」。それは主として知覚の分野のことだったが、ひろく真実に向かう研究者の基本的態度であると私は思った。

実験心理学の初歩の心得—「実験の結果が研究者が予期したように進まない場合でも、それを調整しようとしてはならない。思ったように進まないというその事実をこそ尊重せねばならない」。他者である人間は、研究者の枠組みに入りきれないということ、子どもの研究の基本の心得でもある。

価値を離れて事実と向き合うためには、「科学は実用を目指してはならない。実際に役立つということは、科学の副産物にすぎない」とティチエナーは述べる。直ちに

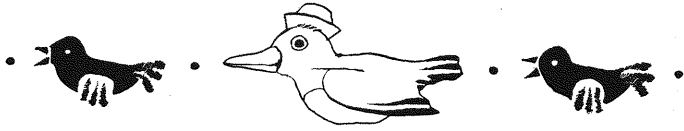


正反対の考えも出るし、それも否定できないが、研究があまりに役に立ち過ぎるとあやまちを犯すことはこの半世紀の歴史の中で私共が見てきたことである。

当時、高木先生は山雀（やまがら）の知覚の研究をしておられた。「動物心理学は、本能とか知能とか大きな分野を見渡すのではなく、小さな行動から樹立せねばならない。またすべての行動はできるだけ簡潔に解釈されねばならない」とかく大きな問題を考える傾向のある私はこのことを印象深く聞いた。そして「今日は高木先生の講義を聞いて蘇生した感があった」とノートに記した。後に保育の実践の中で考えるようになった私は、眼前の小さな現象を考えることの面白さと重要さを知り、この言葉を思い出した。

高木貞二先生は事実と理論との両方の透明さを重んじられた。頭が熱くなるまで考えると、入り組んだことが次第に澄んでくると先生はよく言われた。それには時間がかかる。子どもの現象には大人と子どもが入り組んでいて、透明とは程遠いことが多い。もともと生命性は混沌のなかにある。人為的に理論の枠にはめると生命性が失せてしまう。簡単に割り切らないで時間をかけるうちに次第に澄んできて、全体像が見えてくることは、保育の中で私共はしばしば経験するところである。

事実とは何かという根本的な問いはあるにせよ、事実を積み重ねる中に法則を見いだそうとする所に科学としての心理学の方法がある、我々はまだその出発点に立ったばかりであるというのが、この時期の学生の心意気だった。「人生から夢を生み出し、



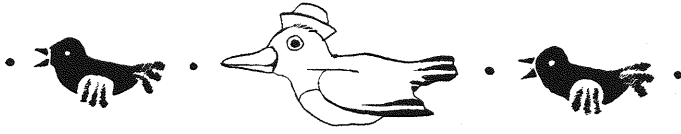
夢をひとつひとつ現実としてゆくことが人生である」というマリイ・キューリーと言葉、「科学と平和とが無知と戦争とに勝ち得るであろうことは動かすべからざることであると信ずる」というパスツールの言葉を教えられたのも爆風で破れたままの硝子窓の教室であった（昭和二十一年三月六日）。

オペレーショニズム―操作主義

オペレーショニズム―操作主義は、この時期に教えられたもうひとつの科学方法論であった。「科学的概念はそれが得られた具体的操作を明らかにすることによってのみ、はじめて正しく客観化される」という主張である。「事実」は、それが得られた具体的手続き（操作）を示すことによって、またその範囲においてのみ妥当する。それなしに「事実」を絶対視することはできない。

実験心理学においては、ある結果が得られるまでの手続きを厳密に吟味することができる。その同じ手続きを踏むならばだれでも同じ結果を得られることが確かめられたときに、それは公共の科学的知識となる。つまり反復可能性である。このような科学的知識を積み重ねることによって知識の体系が出来上がる。この時期に、象牙の塔を作り上げるのがアカデミックな学問の理想と考える傾向も生じた。後に分かかってきたように、知識の体系も常に開かれていなければならない。

子どもについて言うと、ひとつの行為には多くのことが関係していて、同じ出来事



が反復されることはない。教育や保育の場で起こることは一回限りである。大人自身
がそのときに全人格をかけて応答することによって次の場の展開はかわってくる。ど
んなに科学的に確立されたように思われる理論体系でも、そのまま具体的な保育の場
に応用することはできない。当時はそこまで気が付かれていなかった。

復員して軍隊服のまままで大学にあらわれる先輩の学生を日々加えて、教室は活気に
満ちていた。講義の合間に三四郎の池の水の面、青空にもくもくと湧き上がる雲を眺
めて、友人たちと共に、もはや軍隊に行くこともなくひたすら学問を追求できること
を感謝した。

私の日課は、朝、焼け跡を耕して植えた南瓜や甘藷を見回ることから始まったし、
リュックサックを背負って食料の買い出しに行くのも相変わらずだったが、自分が心
行くまで疑問を探究できたことは、戦後直後の日本の青年に与えられた恵みであつ
た。日本各地で民主主義を学ぶ青年学級が始まり、中、小学校で新教育の実践が試み
られたのもこの頃であった。

児童心理学

子どもの発達を純科学的に研究し始めたいと考えた私は、どこから着手したらよい
か、高木貞二先生の研究室を訪ねた。先生は、子どものことは分からないがと前置き
されて、自分が関心をもっている空間定位の研究はどうかと言われた。上下、左右、



前後等の方向知覚は発達のにどうであるのか。常に仰臥している赤ん坊にとつて、上とは頭の上方なのか、それとも天井の方向なのかというような問題である。はいはいをし、立ち上がるようになるときにそれはどのように変化するのか。更に、幼児になつたとき、「真直ぐ」というのは、自己の身体方向によつて規定されるのか、それとも空間の物的配置によるのか。例えば鉛筆を「真直ぐに置いてください」と指示を与えて、部屋の中央に斜めに置いた机に向かつて歩いてゆかせたとき、子どもは自分の進行方向を規準にするのか。机の方向や形、部屋の方向、歩いて行く方向などの条件をかえたらどうなるか。私は親戚の子どもや日曜学校の子どもたちにもこの実験をやつてみた。若いときにはこういう普段見慣れないことをやるとひどく学問的なことに思えて得意な気持ちになるものである。

その結果を大雑把に言うと、容易に予測できるように、幼児は自分の身体の方向を規準にし、小学校三年生くらいからは机の方向が規準になり、その後は規準の取り方の自覚によつて基準は相対的に変わる。勿論すべての子どもがそうだというわけではない。ひとりひとり違う。子どもは最初は実験を面白がるが、条件をかえて繰り返すうちに興味が失せ、私の方も類似の条件の反復に疑問を持つに至つた。しかしこの後、子どもとの生活の中で私は折りにふれて上下、左右、前後などの意味について興味をもつて考えるようになった。これを比喩的に考えると更に面白い。最近の私の著書『保育者の地平』（P.12―22）で子ども時代の空間体験を考えたととき、この実験

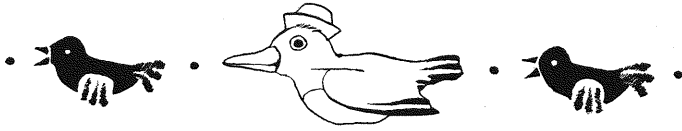


が私の頭にあった。

フォルケルトの『実験児童心理学』

当時、東大心理学教室には児童心理学という名のつく書物はごく僅かしかなかった。その中にフォルケルト (J. Volkelt) の『実験児童心理学の進歩』(一九二六)があった。一九四六年頃には一九三〇年代の洋書は新しい部類だった。W・シユテルン夫妻の『七歳までの幼児の発達』は古典的児童心理学書だったが、一九一四年の出版で余りに哲学的に見えた。後になって人間科学の観点からこれは洞察にとむ著作であることを知ったのであるが。

このフォルケルトの書物のなかに実物模写の研究があった。立方体、円筒、円錐を机の上において、「この通り描いてください」と子どもに指示する。子どもは立方体を模写するのに、展開図のように、見えていない面まで描いてしまう。また、円錐を描くとき見えていない底面を丸く描く。子どもは見えたように描くのか、それとも知っていることを描くのかという古典的課題がここにある。更に、円錐の頂点の尖った部分を手に持って描かせると、子どもは頂点を何重にも丸く塗りつぶす。触運動感覚が描画に大きく作用するのである。それから二十年以上も経って後、私は実験ではなく、自分の子どもたちが自由に描いた描画の研究をすることになるが、このときに考えたことが下地になっているような気がする。



ゲゼルの発達研究とCIE図書館

当時G H Q（連合軍総指令部）が日比谷の濠端の第一生命ビルにあり、その並びの日比谷交差点の角に、占領軍のCIE図書館があつて、一般に公開されていた。二階の図書室のインフォメーションデスクには米国婦人が座つていて親切に対応してくれた。とくに心理・教育の分野の専門書が豊富にあり、新着のジャーナルが開架式書棚に並んでいた。米国の教育使節団が来日したのもこの頃だったから、心理教育関係の図書がとくに多かったのだろう。東大の心理学教室とは比べ物にならない、明るく新式な図書室だった。ジャーシルト（A. T. Jersild）のチャイルド・サイコロジでもそこではじめてみた。カーマイケル編のマニュアル・オブ・チャイルドサイコロジ（L. Carmichael Ed. 『Manual of Child Psychology』）を見つけたときには、戦時中にも地道に続けられていたアメリカの児童研究の集大成にふれて、天にも昇る心地がした。

以前に私が旧制高校の時に愛育研究所で目にしたアーノルド・ゲゼルの『Atlas of Infants』のその後の著作である『First Five Years』や『Five to Ten』もそこにあつた。これは実験心理学の科学研究とは違い、子どもの生活の全体を具体的に知ることができた。標準場面が設定されるとはいえ、それは生活場面に近いもので、いわゆる知能検査のように人為的に作られた状況ではない。ゲゼルは子どものことをよく知っており、生命的な遊びをよく知っていることは、数字の並ぶ研究書の行間から窺え



た。実際、彼は一九二〇年代にイエール大学児童研究所にナースリースクールを創設している。私が数年後にアメリカに留学したときすでに、心理学者の間で、ゲゼルには理論がないという批判を受けていたが、私は彼ほどに子どもを多く見ていた心理学者はいないと思った。ただ、この時代の科学的研究方法ではこれ以外に表現の仕方なかったのだと私は思う。

戦時中の暗い精神主義教育の後、科学は世の中に明るさをもたらすシンボルであった。一九四六年、一九四七年の初期の時代の科学心理学から私は大切なことを学んだ。そのことを記したいと思った。

方法という語は、ギリシャ語の*hodos*（道）から由来している。道はどこかへの道である。目指すところに導かないときには迷い道になる。目指すものが何なのか分からなかったら、いかに方法が精密で厳密であっても、それは無意味になるだろう。この後、一九六〇年代、行動科学全盛の時代を迎えることになる。

私は保育の実践の中で子どもを考える間に、関係の中で生成する子どもの研究は自然科学とは全く違う方法論に立たなければできないと考えるに至ったが、それは長い模索の後のことである。